| | |
|---|---|
| 氏　　名 | **宮崎　弦太** |
| 学位の種類 | 博士（文学） |
| 学位記番号 | 第 5732 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 24 年 3 月 23 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当者 |
| 学位論文名 | **社会的拒絶への反応の規定因とその影響過程－二者関係の性質に注目して－** |
| 論文審査委員 | 主　査　　教授　池上　知子　　副　査　　教授　山　祐嗣 |
| | 副　査　　教授　湯浅　恭正 |

## 論　文　内　容　の　要　旨

他者から拒絶され、社会的絆を失うことは、われわれにとって大きな脅威となり、様々な心的反応を引き起こす。本論文は、これまで社会的拒絶研究で看過されていた自分を拒絶した相手との関係性に注目し、大学生並びに社会人を対象に実施した 9 つの質問紙調査の結果に基づき、二者関係の性質によって拒絶への反応が規定されるプロセスとその背後で働く心的システムの特質を明らかにすることを目的とした。本論文は、序章と終章を含め全 6 章から構成されている。

序章では、これまでの社会的拒絶研究を概観し、その問題点を整理した。

第 1 章では、関係喪失コスト（当該関係を失うことによって被る損害の大きさ）が拒絶への感情反応と行動反応に及ぼす影響を 3 つの研究によって検討した。その結果、喪失コストの大きい関係ほど、相手の拒絶のサインを敏感に検知し、関係維持機制としての自己関連感情が悪化することで、関係修復的な対処行動が促進されることが示された。

第 2 章では、関係喪失コストに加え、相手に対する受容期待（相手は自分を受け入れてくれるだろうという期待）が拒絶への感情および行動反応に及ぼす影響を 2 つの研究によって検討した。その結果、2 つの関係要因が拒絶への関係修復的な対処行動を促進する複合的な影響過程の存在が明らかになった。

第 3 章では、受容期待が拒絶への感情反応に及ぼす影響を調整する要因について 2 つの研究によって検討し、相手に対して形成される受容期待は、常に拒絶のサインへの感受性を低下させるわけではないことを見出した。

第 4 章では、関係喪失コストが拒絶への感情および行動反応に及ぼす影響を調整する要因について 2 つの研究によって検討している。そこで得られた結果から、特定の対人関係が喪失コストという点から評価され、その評価に基づき拒絶への反応が制御されるのは、二者関係の中で自分と相手の得ている利得が衡平になることを重視する交換規範が優勢な場合であることを示唆した。

終章では、第 1 章から第 4 章で得られた知見を踏まえて、親密な二者関係において拒絶への反応を制御する心理システムの統合モデルを提案した。このモデルでは、われわれには親密な対人関係を維持するための 2 つの反応システムが備わっていると仮定する。第一の反応システムは、二者関係のなかで形成された相手との強固な絆に基づく安心感によって反応を制御するシステムであり、相手の拒絶的反応に対して即座に関係修復行動が起動するよう設計されていると考える。第 2 の反応システムは、関係喪失によって自己が被る損失の評価に基づき反応を制御するシステムであり、相手の拒絶的反応に対して、関係の悪化を警告する感情が生起し、その感情の強度に応じて修復行動が動機づけられるように設計されていると考える。親密な二者関係では、通常は、第一の反応システムによって拒絶への反応が制御されるが、相手との間に形成されていた強固な絆に揺らぎが生じ、安心感による反応の制御が困難になったとき第二の反応システムが起動し、喪失コストの評価に基づき関係の維持が図られるようになると予測する。

最後に、本論文で得られた種々の知見と、それらに基づき構築された統合モデルが、これまでの社会的拒絶研究に対して、実証レベルと理論レベルの双方でどのような貢献をもたらすかを論じた。

# 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

親友や恋人など親密な関係を築いてきた相手から拒絶され関係を断ち切られることは、人に大きな痛手をもたらす。相手との関係から得ていた様々な恩恵を失うだけでなく、自己の主観的価値が低減するからである。したがって、そのような場合、人は相手との関係を修復しようと強く動機づけられるが、同時に、相手から再度拒絶されるリスクを回避しようとする動機も喚起される。本論文は、これら相反する動機の間の葛藤を人がどのように解決し、関係が維持されるのか、その心的メカニズムを詳細かつ包括的に検証したものである。1990 年代半ば頃より、社会心理学の分野において、社会的絆を希求する心性がわれわれ人間にとっていかに根源的なものであるかが再認識され、他者からの拒絶（社会的拒絶）に対して人が示すさまざまな反応を説明する多くの理論モデルが提起されてきた。本論文は、そのなかで見過ごされてきた重要な問題として、自分を拒絶した相手との関係性に注目し、相互依存理論とリスク制御理論という 2 つの理論的視座から予測される心理過程相互の関係を統合的に記述するモデルの構築を目指した意欲的で独創性に富んだ論文といえる。加えて、大学生並びに社会人を対象に入念に計画された９つの質問紙調査を実施し、そこで得られたデータに対して階層的重回帰分析や共分散構造分析など高度な統計分析モデルを適用しながら、綿密かつ慎重な議論を重ね結論を導くなど、方法論においても特筆すべき点が多くある。また、序章では、単に先行研究を概観し整理するにとどまらず、著者独自の視点から先行研究の知見を有機的に結び付け拒絶に対する対処を可能にしている心理学的機構の骨格を描き出し、本論文で報告する各研究がその構図の中にどのように位置づけられるかを示すなど、序章自体が一つの完結した理論論文としての性格を備えている点も高く評価できる。そして、続く第 1 章から第 4 章にわたって上述の９つの実証研究の成果が組織的かつ体系的に提示され、各章における議論を総括する形で、終章において、親密な二者関係において相手から拒絶された場合の反応を制御し関係を維持、修復するための心理システムに関する統合モデルが提案されている。総じて、本論文は論理構成や体系性において卓越している。

なお、本論文で報告された質問紙研究のほとんどにおいて、論者は、特定の人物から拒絶される場面を想像させ、その想像上の場面における自身の心的状態の内観報告を求めるという場面想定法を用いている。この方法は、理論的に予測される心理変数間の関係を検証する際、さまざまな剰余変数の影響を統制しやすいという利点があることから心理学では多用される手法である。けれども、これはあくまで仮想現実に対するメンタル・シミュレーションを遂行しているものであり、そこで観測される反応から導かれた原理が現実場面での実際の反応をどこまで予測しうるかは今後検討を要するであろう。だが、こうした方法論上の限界と課題を考慮しても、本論文がもつ学術的価値はそれを補って余りあるものがある。社会的拒絶研究はこれまでに膨大な知見を生み出しているが、相互に矛盾するものも多く、それらを整合的に説明する枠組みの構築が望まれる状況にある。そうした研究状況にあって、本論文の終章で提起された統合モデルは、今後の研究の方向性を探る上で有用な枠組みを提供するものとして高い評価を受けることが期待できる。

以上の所見により、本論文は、大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。